



## 拉致と雑誌『世界』の今日

長瀬 隆

### 拉致と植民地支配の相殺論

二〇〇二年九月十七日以前、年ごと日ごとに強まる北朝鮮にたいする拉致疑惑にたいし、それをありえないと否定するメディアと執筆者たちが存在した。それだけではなく、彼らは疑惑を表明する人々を非難攻撃した。彼らは一樣に北と心情的にながっていて、北との国交交渉の必要を説いていた。

私は拉致を北の仕業と想っていたから、九・一七の金正日による事実の承認は驚きではなかった。驚きは、多くの人々同様に、「死亡者」の数の多さであった。わけても横田めぐみさんの「自殺」発表には衝撃と憤怒を覚えた。

数日後朝日新聞に在モスクワの和田春樹氏のコメントが掲載された。疑いもなく拉致否定の第一人者であったこの人物は、自己批判もとおり一遍にすまし、原因を国交関係が無いこと、つまり「戦争状態にある」ことに求め、過去の植民地支配にたいする反省の必要を説いた。これはその後には齧出することとなつたいわゆる相殺論の走りであった。

しかしながら国民の大部分はこうした論には惑わされず、憤激し、拉致された人々と家族の方々にたいする同情の声は列島を縦断し満ち溢れた。日本人が瞬時にこうまで激昂したというのは珍しく、相似するものとして、私は一九五四年の第五福竜丸の米水爆実験による被ばくのときのことを思い出したものだった。

同時に、過去においてこのことに否定的に対してきたメディアと人々への批判の声が高まった。その代表的な一つに岩波書店の雑誌『世界』があり、そのうちでも特に目立ったものに、一九九四年、金日成の死に際しての編集長（後に社長、故人）安江良介氏が武者小路公秀氏を相手におこなった対談（九月号）があった。私もあらためてそれを読み直した。

誤りをおかしていたメディアは時とともに軌道を修正しはじめた。『世界』とは同傾向であるものの、発行部数では比較にならない多い朝日新聞も国民的批判をうけ、試行錯誤を経つつ修正した。ところが開き直り、居すわりを指すことになつた

メディアがあり、それが『世界』であった。この雑誌は七〇年代から八〇年代にかけて足かけ十六年の長きにわたって、T・K生の仮名の筆者による「韓国からの通信」を連載した。『世界』編集部はそれを挙げ、韓国の軍事政権とほとんど唯一積極的に関わってきたメディアであることを自負強調し、もって己を擁護弁護したのである。そしてその主張をより徹底化する必要を感じたのであろう、〇三年九月号でT・K生が「人間的資産とは何か」（一九九四年、岩波書店）などの著書で知られる池明観<sup>イキミケン</sup>氏であることを明らかにした。

〇二年九・一七の後、十月、中国東北地方に在って脱北者の支援にあたっていた加藤博君が消息を絶った。これを知らせてくれたのは平和事務所を主宰する吉田嘉清氏（日本原水協元代表理事）であった。私たちは互いに旧知の間柄であり、一九九一年には、この先で触れることになる広島の社会運動家、在韓被爆者の広島での治療にあずかって力のあった渡辺正治氏とともにチエルノブイリを訪ねたことがあった。

数日後加藤君は中国公安から釈放され、強制的に国外退去せしめられて帰国、一躍時の人となり、ドイツ人医師N・フォラツェン氏などとともにテレビにも登場するようになった。私たちは彼の講演会を企画し、十一月十九日に東京文京区民センターでそれをおこなった。北の公安に引渡すぞと脅され、その場合は処刑を免れなかったので死を覚悟もしたという告白をふくむ話は、まことに充実したものであって、参会者に強い感銘をあたえた。

してはその紹介には積極的な意義を見出ししていたのである。この間、『世界』は「連載討論・戦後責任」（編者は大沼保昭氏と田中宏氏）を連載しはじめ、九月号には「サハリン残留韓 国・朝鮮人問題」という高木、大沼、田中、五十嵐広三ら四氏による座談会を掲載した。日本時代樺太と呼ばれていたその地は、北海道がそうであるように開拓地であって植民地ではなく、内務省に所轄されていた。にもかかわらず植民地としてシリールズに取上げられていた。草思社加瀬昌男会長より読んでみるようにと電話をいただき、多大に間違った論議がなされているので、それを批判する一文を草し、『草思』十月号に採用される運びとなった。その執筆にあたって私は新井佐和子著「サハリンの韓国人はなぜ帰れなかったのか」（小社刊）に多大に依拠し、引用もさせてもらっていた。したがって新井さんの校閲が必要と考えて予め原稿をお送りし、全面的な承諾をえていた。

うめき声をあげたT・K生

またその頃のことである、私は川上氏から池明観氏の講演会の案内状をうけとった。そしてさらにその後吉田氏から東京新聞九月十五日号掲載の池氏へのインタビュー記事を読むようにという連絡をうけた。それは「T・K生のジレンマ」と横に最大の活字で大書され、「米の強硬策に対案なし」と縦書で補足された見出しのものだった。池氏は「私はいま、かつてない混乱に陥っているのです。アジアをこうすべきたとか、米国や日本はこうあるべきだとか言えない。自信がないんです」と始

会が終わっても二十人近くが加藤君をかこんでの懇親会にうつり、一人一人が思うところを述べた。この中で私がもっとも心打たれたのは、出版社同時代社社長の社長であり、『査問』（一九九七年、筑摩書房）その他の著作家である川上徹氏の話であった。六〇年代初めには民青系全学連委員長でもあった氏は、北朝鮮への帰還運動には深く係わったようであって、それを回顧しつつ、「あれは一体何だったのか」と痛苦に身をよじるようにして絶句したのである。「慙愧の極み」と言っているように私には見えたものだった。

その年私は「日露領土紛争の根源」（〇三年五月、小社刊。以下においては「根源」と略称する）の執筆に集中していた。すなわち日露問題に係わっていたのであるが、私はその仕事が韓国朝鮮問題と無関係であるとは思っていなかった。樺太IIサハリン問題を主題としながら私は現代サハリンの歴史家ヴィンコフの仕事に触れた。ソ連崩壊後サハリンで公開された共産党の文書にもとづき、この戦後のサハリン生まれのロシア人は、その地のコリアンの長期にわたる残留はソ連による抑留であったとしており、私はそれを紹介した（『根源』二六八頁）。これをめぐってのいわゆるサハリン・コリアン訴訟で高木健一氏をはじめとする一連の人々は、日本政府の責任のみを追究し、ソ連と北朝鮮のそれについては触れないことによって免罪した。まったくの無知のなせるわざであって、それを奇貨としてサハリン知事フォードルは彼らの老後の面倒を日本に押し付けようと言った。その誤りがロシア側によって正されたわけで、私と

めていた。金大中前大統領のブレインとして「太陽政策」を進めてきた氏は、KBS（韓国放送公社）理事長として本年三月に平壤を訪れた。つまりは国賓的存在として行ったのである。しかし「ホテルの自室で独り言も言えない。盗聴がありますから。心にあることをひと言も話せない重い日々でした」「農村ですが、飢餓民があふれているのですよ。子どもは、頭ばかり大きくて、背が伸びていない。うつろな顔なのですよ。山には木がなく、中腹まで畑です。雨が降ったら、どうなりますか」と自問し、北出身であるためその地方の往時を知る氏は「半世紀前より荒廃してました。あれを再生させるなんてことは」と慨嘆し絶句しているのだった。

こうした北の実情は、最近数年の北関係の出版物に接してきた人々には広く知られており、すでに分りきったことである。だから新井佐和子さんのような人は「今ごろになってですか」と呆れている。しかし日本在住の長いこの韓国を代表する知識人はその一冊も読まず、したがってまたなんにも知らずに「太陽政策」を提案促進し、五十余年ぶりに再訪していま初めて知ったかのように驚愕しているのである。

『世界』の常連の執筆者和田春樹氏をロシアと朝鮮の双方にわたる碩学と呼んで跪拝する人に姜尚中氏がいる。氏は和田氏とともに「東北アジアの家」という当人さえも「痴人の夢」などと自嘲する提案（『日朝関係の克復』（集英社新書））をあらわし、「あるがままの北を認め」て国交を結ぶよう提言している。しかし『世界』がその功績を自讃してやまないかつて

のレポートの韓国人執筆者は、今や、「北の体制を国際的に保証することで、朝鮮半島に幸せがもたらせられるとは考えられないのです」とうめき声を発しているのである。つまり和田氏や姜氏の立言はまさに痴人の夢にほかならないとして否定されているのである。

まことに遅れに遅れて北の悲惨な実情を知り、それは誰の責任かと自問せざるをえなくなり、この知性は金日成・正日親子の名を口にしかけている。そしてアフガニスタン、イラクとの関連で「米国の強硬策には疑問をもっていますが、今の私には対案がないのです。こんなジレンマに陥ったのは初めてです」と嘆くのである。

東京新聞記者がでたらめを書いたのではないことは、その内容がほぼ同時に発表された『韓国文化』九月号の「北に旅して」(当日配布された資料集に訳文が所載)という文章と一致していることからわかる。記者は韓国文のこの文章を読んで後にインタビュアーを申込み、記事を作成したと思われる。原稿が池氏の同意のもとに発表されたことは明らかだ。

川上氏らは、拉致の事実にもかかわらず、「太陽政策」に期待し、拉致の解決を後回しにしても、世論に抗して国交交渉を継続すべしと結論したようである。そしてそのためにこそ、最良の講師とみなして池氏の講演会を企画し、すでに案内状の発送を終えていた。したがってこの記事には驚愕せざるをえなかったのであって、急遽ソウルに飛び、池氏に発言の真意を質すことと相成った。事としいでは講演は主催者(10・22講演実

いるかのように報じられました」と否定的に紹介していた。しかし会場の大部分は東京新聞記事については知らなかったのだ。たとえばこの日広島からは渡辺正治氏が出席されていた。旧知の池氏の講演会であったがためであるが、渡辺氏は東京新聞記事のことは知らなかった。しかし知っている者にとっては、それはまことに砂を噛むように味気の無い、かつ苛立ちのつった講演会であった。主催者はあらかじめアンケート用紙を配布して、そのなかには講演にたいする感想を記入する欄があった。並んで坐っていた吉田嘉清氏は、そこに「どうして北について話さないのか」と記して私にみせていた。

時間がたつにつれて、主催者側が講師に緘口令を敷いていることがはつきりとした。すなわち金正日体制への批判は封じていたのである。その理由は、それが日本における「北朝鮮への敵意を煽る」ことになるからだ。しかしその「敵意」は拉致が無かったならば起こらなかったことをこの人々は感得していなかった。実行委員会には親北派諸団体が参加していたが、その一つの機関紙には、日朝交渉を妨げる人物として安倍晋三と佐藤勝巳救国会代表の名を特記する和田春樹氏の演説が紹介されていた。

一九七三年、金大中の東京での拉致事件が起こった年に連載が始まった「韓国からの通信」を私は愛読しなかった。それとというのも批判の対象となっていた朴正熙軍事政権が北の金日成軍事政権と切り離されて問題にされていたからだ。一方が存在していることによって他方が存在しているという相互関係

行委員会)の期待にまったく反するものとなるのである。かくて一時は中止になるかもしれないという噂まで流れたのであるが、ほどなくソウルでの会談が川上徹氏文責のメールで送られてきた。文意はまことに不明瞭であったが、ともかく講演は予定どおり十月二十二日に教育会館でおこなわれるということであった。

「講演会開催までの経過報告」には次のような文言が記されていた。

「北東アジアの平和を持続させ、諸国民の友好と豊かな生活を実現することが、私たちにとって大きな課題となっています。ところが日本の政治においては、北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)に対する敵意を煽り、強硬論を主張する危険な勢力が、侮れない力を持っています」「終了後に、二、三の質問をうける時間を設けますが、それはあくまでも先生のお話をよく理解するための質問に限らせていただきます」。このことを主催者は講演に先だつて口頭でより強く申し述べた。そしてそれが意図したものは、池氏の話が始めると鮮明になっていった。「T・K生の時代と『いま』」と題されたその講演はまさにT・K生時代の思い出について語るものであった。しかし、かつてはその体制への違和感のゆえに北を捨てて南に逃れ、いま金大中の側近として北を訪ねて体験したことについては、待てど暮らせど一言も語らなかつたのである。

東京新聞のインタビュアーについて主催者は、同じ「経過報告」のうちで「一部マスコミで先生が北への強硬策を容認して

への考察が欠落していたからだった。

私はソ連貿易に従事して暮らしていて、北について日本国内だけで暮らしている人々よりも知る立場にあった。たとえば朝鮮戦争中、北からは多くの難民がソ連と中国に出たのであるが、そうした人々と私はソ連極東で会い交わっていて、彼らが帰国せずにソ連国籍を取得した理由をつぶさに聞いていた。加えて私は七〇年代末には業務で北にも、後には南にも行っていて実情を見知っていたのである。

私はかつて一度も北には幻想を抱かなかつたが、それは更にもっと翹つて、私が樺太に産まれ育つてソ連占領下で暮らして引揚げていたためだったと思う。このことは、新井さんとともに、サハリン・コリアンの帰国(帰韓)事業のバイオニアとなつた朴魯字氏夫人である堀江和子さんとお会いして話を聞くうちに、まことに鮮明となった。夫妻は、戦後、私と同じ大泊(コルサコフ)で同じ町内に住む人だったのだ。この僻遠ともみえる地は、それゆえにこそ、国際関係がよく見とおせる地だったのである。

一九五九年に始まった北への帰国事業は、今日ではもはや悲劇といつたらいいのか、それとも喜劇といふべきなのか、まことにもつて迷う出来事なのである。朴氏がこれに反対し日本政府に中止を求めたのは、樺太で大陸と北からきた同胞のコリアンと接触したからである。それにより北の状態が見とおせたのにたいし、日本ではまことに見えづらく、ほとんどが盲人同然だったのである。とはいえ夫妻はその先見性ゆえに、新井さん

らとともに、高木氏らに運動を募集され、それから排除されるはめとなった。

世紀のペテンであった北への帰国事業は、それを画策した者があって成されたものである。そしてそれは金日成以外であるはずはなかった。しかしそのことをT・K生の文章はまったく反映していない。そのペテン性は第一船の段階ではつきりしていたという。帰還者たちはタラップを降りると同時に騙されて来たことを知ったという。にもかかわらずこのことは「通信」には最後まで反映されることはなかった。それどころか北はしばしば擁護肯定されていたのであって、金日成はそれに深く満足し、安江良介編集長は最良の日本人として他に並ぶもののない厚遇を平壤でうけていたという。

九〇年代には拉致はすでおこなわれており、その中期にはかなりの話題になっていた。しかし一九九四年の金日成の死にさいしては安江氏は先に挙げた対談でこの人物を「第二次世界大戦後のアジアにおいてきわめて大きい存在だった」と持上げ礼賛している。今日では再読に値しない対談であるが、没後の金正日体制の発足に関連して、黄長燁氏が登用されていることが大歓迎されていて感慨深い。いずれにせよ「世界」の親北朝鮮路線を設定したのは安江氏であって、その後の編集部は今日もそこから抜け出せずにいる。

#### 「歴史は残忍な女神」

現在の池氏は「通信」のこの側面を慚愧の念なしには回想で引用されているエンゲルスの言葉、「歴史はしばしば残忍な女神である」を掲げて嘆いた。すなわち歴史においては苦勞した世代が報いられるのは稀で、その果実を享受する後統の世代は前世代の苦勞に気付かない。そのことをこの言葉に託して愚痴たのである。軍政時代のみならず、朝鮮戦争の記憶もない——当然ながら日本統治時代の記憶もない(？)——若い世代が数的には力をもつようになってきて、氏は疎外されているようなのだ。

ここで珍しく韓国人の口からエンゲルスの名を聞いた私としては、韓半島の南北をつうじて偏在する日帝を非難批判する人々に、もつとエンゲルスを読んでもらいたいと思わずにはおれなかった。西欧人のなかで日露戦争をもつとも早く予見したのはマルクスであり、一八六一年にロシア軍艦が対馬を占拠したことに触れてその危険をエンゲルスに書き送っている。そしてそれを受けるようにしてエンゲルスは、日清戦争をロシアが清国にけしかけたものではなからうかと疑っているのである。

すなわち日本と戦わせることによって利益を得ようとしたのであって、ヨーロッパでのロシア外交の手法を知悉していた彼には容易に想像できることだったのだ。実際戦後はすぐに独仏を誘って三国干渉に出、自身が遼東半島を支配した。そしてその延長として日露戦争が起るのである。やがてレーニンはその見解を継承して日本に正義を認め、その戦勝を喜んだ。

すべては「根源」(一七、一八八頁)のなかで述べていることなのであるが、私はここでE・H・カーによるエンゲルスの引

きないはずであり、だからこそ「これまで語ってきたことが、あまりにも政治屋の真似事であったような思いに駆られている。まったくわからなくなってきた」と言うのである。「北に旅して」のうちのこの告白を私はそのように読む。それ以外に読み様がでないではないか。ところが主催者たちはそのことを絶対に語らせまいとした。氏は「北の人々とは話せないのです。本当の対話はできません」と嘆いている。しかし今回日本人主催者たちに対して同様な思いを味わったのではなからうか。気の毒といえどもことに気の毒である。

しかしそれは、その人々がかつて氏の愛読者であったのだから氏の不徳のいたすところでもあるのではなからうか。金大中氏は日本でも人気があり、私もまた一時は氏に期待した。しかし大統領就任後の「太陽政策」には首を傾げるものがあり、疑問は、退任後の北への送金疑惑によって、また現盧武鉉大統領によるその揉み消しによって強まった。それが何に起因するものかを、私は、近刊の李度亨(イ・ドヒョウ)「韓国を破壊に導く男」(小社刊、〇三年九月)を読んで知ったところである。まことに「地獄への道は善意によって敷きつめられている」のである。

T・K生時代の回顧談に終始しただけのその講演は、「世界」九月号の編集長岡本厚氏によるインタビューとはほぼ同じ内容のものであった。とはいえ、目新しいものが無かったわけではない。現在の盧武鉉大統領の就任演説の原稿作成者は自分であったことを明かしつつ、その後同政権から疎んじられていることを、氏は、E・H・カーの「歴史とは何か」(岩波新書)のうちに

用が、秀抜ではあるが拡大解釈的なものであること、また池氏による引用がカーには依拠しているが同様に拡大解釈を免れず、元祖のエンゲルスからはかなり離れていることを指摘しておく。そしてこの華麗な言葉に託して私もまた言いたいのである。私はレーニンに「根源」において日露戦争を日本にとつて正義の東北アジア全体の防衛戦争と規定した。そしてその際の、またその後のコリアンの運命について「死骸の山を越えて勝利の戦車を行って行く残忍な女神」の避けようのなかった働きをみるのである。池氏の読みかたよりもつとエンゲルスの、またカーの原意に近いと思うのだがどうだろうか。歴史が残忍なのは、世代間においてだけではない。民族間にもあったことなのである。そしてこのことが理解できない人々が、コリアンへの過剰な贖罪意識に呪縛され、わが身を観念的に韓半島の側におき、日本の過去を無限に断罪するのである。そのような一人物について、池氏は岡本氏とのインタビューで述べている。

「とにかく韓国人、在日朝鮮人を絶対的に擁護する。彼らに欠陥があるとしても、日本人としては言う資格がないということが安江さんの哲学でした。(略)日本人は、朝鮮人の悪口を言う資格はないんだ、といって自分は絶対に一言もいわない。いかなる日本人が在日朝鮮人とか朝鮮半島の問題とか北の問題に対して批判しても、安江さんはそれはそうじゃないと言っていた。彼は意図的に日本人はそれを言うてはならないんだ、倫理的にそれを言う資格はないのだという立場でした。(略)占領してああいう悲劇を与えておいて、いまさら日本人が何をいう

かということでした。とにかく彼らが欲することは全部してやればいいんだ、これが日本人の義務だと思っていた」

過ぎたるは及ばざるがごとしという格言がある。ここに明らかにされている安江氏のこの偏向が「世界」の路線となった。拉致は無いと言い続け、韓国に疑いを転嫁し、金正日が認めると植民地支配との相殺論で逃げ、揚げ句の果ては拉致家族とそれを支援する人々に敵対する今日の「世界」の腐敗がどこから出てきたかが、これによって分るのである。

私は、北擁護者のうちに多年にわたって反核運動に従事してきた人々がいることに注目している。私は彼らのヒロシマを疑わしく見てきたのだったが、それは、両者は両立せずまたしてはならないものだからだった。たとえば安江氏は前記武者小路氏との対談で、「広島、長崎の体験は人類の普遍的な大きな課題です」と金日成に話したと述べている。私はその信念が池の証言にある精神と両立したことが不思議なのである。私は、安江氏のヒロシマは皮相にして不徹底だったので、北の人民抑圧の容認と両立したのだと考える。

また私は、安江氏を含め、わが親北者たちのあいだでかねがね黄長燁氏が注目される存在であったともれ聞いている。したがって九七年の来日にさいしての朝鮮総連主催の帰国歓送会はその人々が集まって盛会だったという。ところが、その当の人が帰路の北京で亡命して、一様に「裏切られた、裏切られた」とばやくにいたった。ただしすでに深々と親北路線をとっていたので、転換しようもなく今日を迎えた。かくて〇二年

たこの人は、きつぱりと北の問題とは独裁か民主かの問題にはかならぬと言いきっていた。金正日をバカ者と呼び、その体制を支持しているのはおよそ二百人ほどと人数を特定し、その打倒なしには北の人民に救済はないこと、かつそれは戦争に訴えずに可能であることを語っていた。池氏が七十年代後半の年齢なのにすでに老衰していて終わった人の印象を与えたのに対し、より年長で八十年代半ばのこちらの方は使命感にみちいて若々しいのだった。夫人の自決も家族全員の断罪も覚悟のうえで脱出した氏の言葉には常に千金の重みがある。

日本の統治時代に韓半島の人口は大幅に増大しており、今日のような飢餓は生じなかった。その地の近代化は日本によっておこなわれたのであり、朝鮮戦争の破壊に日本は直接には関与しなかった。コリアンはもつと世界的視野から過去を見るべきなのではなからうか。たとえば一昨年、冒頭で述べた加藤博君の講演の日、渡辺正治さんから頂いた冊子「東アジアの被爆と平和」（広島大大学院国際協力研究科発行）において、同科の崔吉城教授による序文にこんな文言がある。

「広島県に住むようになってから常に耳にする言葉は、『原爆』と『平和』である。それらの言葉は広島島の専売特許のように聞こえてくる。かつて軍港であった呉港が近く、日清戦争の発端、進軍式の地であった広島は平和という言葉にあい相応しくなくように感じたからである。日本人が被害のみを強調するのは論理的にみてナンセンスである。アジアの人々が被爆感情を共有してくれないのは当然である。なぜ加害の事実は抽象され被害

九・一七以降それらの人々の言動は支離滅裂、錯乱の状態を呈することにいった。その一人である在日の姜尚中氏は、独裁を肯定して記している。

「金正日国防委員長は事実上の『首領』として、法と制度に縛られない超越的な存在である。その国防委員長が『告白』『謝罪』したということは、対外的には国家のメンツを捨ててまで、正常化交渉の再開にすべてを賭けたことになる。だが日本政府は拉致被害者を送り返さず、永住帰国へと方針転換した。それによって前述の可能性はどこかに吹き飛んでしまった。金正日体制が続く限り、拉致問題の解決はありえない。だから根本的な解決のためにはその体制を打倒すべきだ。このような『暴論』を『正論』として受け入れかねない日本のメディアの状況は、反共的な北朝鮮敵視が骨の髄まで染みこんだ、かつての韓国の姿を彷彿とさせる」（前掲書）

かくて日本の悪しき状況を改善し日朝交渉を再開させるべく、かつては互いに対立もした諸勢力が一致結束して池氏の講演を企画したのだと思われる。ところが、期待のその人は意気消沈し別人と化していたのである。このため主催者たちは、北の地獄についてはそれを話さないよう言い含め、会場からの質問にも制限を設けて集まりを仕切つて終えた。私はまことに白々しい思いで会場を後にした。

同じ日の夕刻10チャンネルは訪米直前の黄長燁氏のソウルでのインタビューを予告していて、私はその録画を翌日にみた。北を改変すべく脱出しながら、韓国では軟禁状態におかれてき

妄想的に語るのであらうか」

原爆資料館について、韓国人の第三者の言葉として「被害妄想的な展示」という言葉が述べられており、狭量な理解であると感じざるをえなかった。伝えられるところでは、その後、日本文部省（現文部科学省）の研究費により在サハリンのコリアン調査のために現地に出ているとのことだった。

朴魯学氏は自身応募で樺太に渡つたと述べており、コリアン全体について強制連行の事実は無かったと強く否定していた。高木健一氏が訴訟にもちこむ段階で、その煽情性が効果的と考え、「この言葉でゆこう」と言い出し、同じく応募で渡樺したにもかかわらず、金欲しさに「応募も強制連行も同じようなものだ」とこれに迎合していた堀江和子は、その人の実名を挙げてその場に同席していた堀江和子は、その人の実名を挙げてその証言する。しかしながら以後この言葉は無制限かつ勝手に一人歩きするようになり、韓半島に渡った。かくて極めて最近の北朝鮮の対日非難声明にもこの言葉は頻出することとなる。

この言葉で植民地支配を誇張した高木氏ら最初の人々は、私たち両民族の関係を多大に歪めたのであり、まことに罪深いと言われなければならない。サハリンから帰つて報告書を作成する崔氏がこの轍を踏まれぬよう私は願つてやまない。

ながせ・たかし 一九三二年樺太生まれ。一九四七年二月、北海道に引き揚げ、早稲田大学露文科卒業。貿易商社に勤務し、主としてソ連を担当する。著書に「樺太より遠く孤独な」（西田書店）、「日露露土紛争の根源」（小社刊）などがある。